

序

池井優先生は、今春三月をもって定年退職し、法学部を去られる。本号は、先生に縁のある人々が御退職を記念して捧げた論文集からなっている。

先生は、一九五九年に慶應義塾大学法学部政治学科を卒業し、すぐに大学院に進学して、修士課程を修了後、法学部の副手として残り、その後は助手、専任講師、助教授、教授となられて、今回のご退職を迎えられた。その間、三十九年の長きにわたって、法学部の研究・教育に尽くされた。特に、御退職直前の数年間は、政治学科一〇〇周年記念のための募金活動の委員長を務められて、『政治学科百年小史』を纏められたり、募金活動を成功裡に終了させるなど、学部に多大の貢献をなさった。

先生はまた、日本国際政治学会理事や日本国際法学会評議員など学会においても要職に就かれ、更に多くの政府関連委員会の委員を務められるなど、社会的活動も多彩である。先生のご専門は外交史、特に日本外交史であるが、ご専門の関係からか、外国の大学や研究機関への留学や訪問も多く、コロンビア大学やミシガン大学などで客員教授を務められたりした。また、内外の著名な国際関係論学者たちと親密な交友関係を結ぶとともに、日

本の政治的・文化的土壤などについて精力的に外国に紹介され、慶應法学部の対外的窓口を広げることに力を注がれた。

一時、一九八一年からの一年間のミシガン大学留学中は、今世紀最悪の寒さに遭遇され、そのために健康を損ねてしまったことがあり、帰国後も指で胃を抑える仕種を時々お見受けするようになった。しかし、最近では、治療法を全く替えられたとかで、昔のように、再び酒を僅かながらも嗜まれるまでに回復されたのは大変喜ばしい限りである。

池井先生と言えば、専門の外交史の分野だけでなく、慶應義塾におけるスポーツと切っても切れない関係にある。長く体育会競走部の部長を務められ、また体育会理事として慶應の体育の振興に多大の功績を上げられた。この時、こつこつと書き溜められたのが『陸の王者慶應―体育会名勝負物語』であり、体育会各部の古今の名勝負を生き活きと再現された名作である。伝統ある体育会の活動を束ねる仕事には、いろいろとご苦労があったことと思うが、先生は黙々と仕事を遂行して、OBや学生から信頼を寄せられていた。そのほか、先生は在学中落語研究会に所属されていたせいか、軽妙洒落な話で話題を広げ、周辺の雰囲気をも柔らくしてくれた。いつも先生の周りには笑い声が絶えなかったが、それは先生の話術だけではなくて、先生の人徳とでも言うべきであろうか。

しかし、何といっても、池井先生と言えば「野球」(ベースボール)と切り離す事ができない。単に慶應義塾のみならず、日本そしてアメリカ大リーグのことまでその博識と評論の鋭さは知れ渡っており、慶應の名物教授とまで評された。私事にわたって恐縮だが、私が博士課程を外国の大学で修了して帰国したとき、私の将来を親身になって相談に乗ってくれたのは、池井先生であった。同僚のこと、学生のこと学部のこと、慶應義塾のことを常

に考え、学生には優しくもあり、また時には厳しくもあり、ここ数年の池井先生には円熟した、揺るぎない教育者としての風格を私は感じていた。

慶應義塾において異彩を放った良き先輩が、またお一人学部を去っていかれる。どうか、次の新しい勤務地である大学においても、健康に留意されて、お元気で多彩な研究・教育を続けられるよう切にお祈りする次第である。

二〇〇〇年一月

法学部長 栗林忠男